市民の皆さまへ

未来を切り拓く道標　～人・ひと・ヒト～

家庭、学校園、地域等あらゆる場所で、情報化やグローバル化が急速に進む中、科学技術の進歩が人々の暮らしに便利さや豊かさをもたらしました。その反面、急速に進む人口減少や少子高齢化により地域の絆やつながりが希薄になったともいわれています。

本市においては、地域を大切にする心が連綿と受け継がれ、温かい人間関係が築かれてきました。市民の皆さま一人ひとりが人権感覚や人権意識を育むために地域ぐるみで人権のまちづくりに取り組まれてきた成果だと感じています。

「人」の温かい一言は、「人」の心の温度を上げ、「人」を大切にしようという思いを芽生えさせます。人工知能(AI)により社会が大きく変化しても、より豊かな社会を築いていくのは「人」ではないでしょうか。

今回発刊の「Flat ～心の視線の向こうに～」が、市民の皆さまにとって人権をより身近に感じるきっかけとなり、新たな出会いと発見につながることを願っています。

2020（令和2）年3月
西脇市教育長　笹 倉 邦 好

「ゆきちゃんからのメッセージ」から「Flat～心の視線の向こうに～」へ

市民の皆さまに長く愛されてきました「ゆきちゃんからのメッセージ」は発刊から30年になります。これまでゆきちゃんの家族を通して、様々な人権課題について理解していただけるようメッセージを発信してきました。このたび、時代の流れと30年というひとつの節目に、新たな人権啓発資料として、じんけんパンフレット「Flat～心の視線の向こうに～」を発刊する運びとなりました。

「Flat～心の視線の向こうに～」は、「市民の皆さまからのメッセージ」をコンセプトとして作成した西脇オリジナルいっぱいのパンフレットです。市民一人ひとりの人権に寄せる思いや活動をできる限り多く紹介していきます。

「Flat」とは、対等な目線で話し合い関係し合うことです。互いを認め合い尊重し、それぞれの良さに気づけるようになってほしいという願いを込めて、「Flat」と命名しました。

サブテーマを「心の視線の向こうに」としました。命・絆・思いやり等は、形がなく目で見ることはできません。「心の視線」とは、心でしか見ることができないことに思いを馳せることを意味します。これは、人権教育で大切にしたい考え方のひとつです。

「Flat」の頭文字Fからはじまる言葉を、各ページのリードとして表しました。Future（未来）、Fair（公平な）、Fantastic（素敵な）…というように、それぞれの内容と関連づけています。そのページのイメージづくりにつなげてください。

最後に、じんけんパンフレット「Flat～心の視線の向こうに～」が、家庭で話題になったり、学校園や地域で活用されたりすることにより、人権文化の大輪を咲かせる一助になることを願っています。

こどもの笑顔をはぐくむ

「かわいいどうぶつがいっぱい。とってもたのしそうね。」
「おかあさん、ぼくもてをつなぎたいなあ。」
「つながるって、すてきだね。」
「うん。このれっしゃにのって、みんなでいろんなところにいきたいな。」

〈西脇市では、「こどもの笑顔をはぐくむ条例」を施行します。2020（令和2）年4月〉

〈旧市原駅（表紙）〉

生きている証を刻む・命の有限性

人が生まれ、そして死んでいく姿を見てきました。そのたびに私たちは、喜びや悲しみを感じてきました。

人は、いつか死ぬことを分かっているのに、なぜそんなに頑張るのでしょう。

命には限りがあり、唯一で誰も代わることができない、そして、親から、幾多の人からつながっている命であることを知り、そのような命だから、この世に生を受けた存在として、生きている限り大切にしていきたいと思うからでしょうか。

近年、障害者殺傷や児童・高齢者虐待、いじめなど命をないがしろにする出来事や事件が起きています。命に優劣はなく、亡くなってもいい命はありません。学校では、互いの胸に聴診器をあて心臓の音を聞き合う授業があります。自分の命を感じるとともに相手が同じように生きていることを感じ、尊重する心を育んでいます。また、人には、それぞれの生き方があり違った人生があり、その中で輝けることが大切であることを教えています。

昔から「命は時間」といわれ、その時間を若い時には自分自身のために使い、そして、年を重ねるごとに他の人のために使うようにすることが、その人の命を輝かせ、生きている証を刻むことになるといわれます。他者を思いやる人生を送れれば最高ではないでしょうか。

いつか終わりがあること

遠い日の夏祭り。金魚すくい。
そして金魚が死んでしまったあの秋の日。
そっと土に埋めてあげた幼い自分を
覚えている。
生あるものには終わりがあると
しんみり思ったあの夕方。
自分の生命だって
きっと終わりがやってくる。
一度しかない
一度しか抱きしめることのできない
この生命の証を自分はこの世に
どのように刻んでいけばよいのだろう。
もっともっと
生きていることを実感し、生命を
もっともっと輝かせていきたい。

「学校へ行かなくなって」　Wさんの思い

わが子が学校へ行かなくなったのは、小学校4年生の終わる時でした。何が何だかわからなかった私は、無理やり行かそうとしたり、「なぜ」、「なぜ」と原因ばかり考えていたりしました。自分が責められているようで毎日がつらかった。1年がたった頃、ふとしたきっかけで学校以外の受け入れる所（教室）に通い始めました。居場所を見つけたようでした。

「学校へ行くことがすべてではない。」「笑顔で過ごせれば、それ以上のことはない。」と思えるようになったのは、この頃からです。ずいぶん時間がかかりました。

一番しんどいのは子ども自身です。自分に自信が持てずに苦しんでいると思います。でも、頑張って生きようとしていることは親の目にははっきり見えます。そして、子どもの周りには温かく支えてくださる人がいることも。

「兎に角、無事を祈った。」　Ｉさんの回想（神戸淡路大震災時）

「妹は無事だろうか。」被害状況が刻々と伝えられる中、不安は、時間とともに大きくなる。何度も何度も電話をかけるが、いっこうにつながらない。「もしかして」との思いがよぎったのは、私が今まで生きてきて初めて感じた大きな揺れによる恐怖心からだ。妹の顔や家族の姿が目の前に何度も現れる。

無事が分かったのは地震発生から6時間が過ぎた昼時だった。「うちはたいへん。家も壊れた。でも、家族はみんな生きている。アパートの住民の方も全員無事。」の妹の声にその場に座り込んだ。

すぐに100個ぐらいのおにぎりをつくり神戸へと走った。「これが何度も訪れた神戸の街か」ほこりと臭い、笑顔のない人々。出会った瞬間、やつれ気味の妹は「ありがとう。」と、笑顔を見せた。私は、涙がとめどもなくこぼれた。おにぎりを渡すことさえ、忘れていた。

その後、妹の周りの人々のことを聞くにつれ、生死を分ける不条理さを知ることになる。